

静岡県連・40周年記念山行報告書

通算山行NO	会山行NO. 312(伊豆の里山研究集大成)	報告者	加藤秀子
年 月 日	2005年12月29日(木)～2006年01月01日(日)		
山 行 名	2005年冬山合宿・石廊崎～娑婆羅山～猿山～旧天城峠(二本杉峠)		
今回 の 報 告	12月29日(木・晴)		
山 名	南伊豆山塊・富士山(ふじさん・富士山は地域名・三角点名＝長津呂村・三等三角点、240.16m) 恒々山(こうこうやま・三角点名＝入間村・二等三角点、297.05m) 谷戸山(たにとやま・三角点名＝加納村・三等三角点、176.21m)		
2万5千図	石廊崎		
体力度＝3・普通 技術度＝3・普通 読図＝少し難しい 藪漕＝少しある 道標＝全くない 展望＝太平洋が見える			
伊豆最南端の石廊崎から始まった			
コースと タイム	長泉町5:00—修善寺—下田(小田待ち合わせ)7:00—入間8:00—石廊崎 灯台石室神社8:20—富士山10:00—恒々山11:35—二条12:25～谷戸山13:15—林道14:10—下小野15:10—昭吉の湯—下田		
標 高 差	上り＝240m 下り＝300m		
参 加 者	CL・後藤隆徳(58)、斉藤富夫(あさぎり山の会・56)、加藤秀子(56)		

下土狩を予定の時間に出発。まず加藤車を終点の下山口である天城峠入り口の大川端の駐車場にデポ。そして斉藤車で小田と待ち合わせの下田へ向かう。久し振りに小田と対面するが、旧交を温める暇なく小田車と2台でその日の下山口、下小野へ向かい斉藤車をデポ。そして小田車に全員乗り込み、出発点の石廊崎へと送ってもらった。

石廊崎港に車を止め、其処から石廊崎まで小田も歩きで便乗。参道から海に向かい、岸壁に作られた石室神社(海拔4.6m)まで降りて参拝する。荒々しく打ち寄せる波しぶきの向こうに、海の上にポッカリ浮かぶ神津島がよく見えた。境内の水をペットボトルに汲んで、いよいよ伊豆・最南端の石廊崎からの縦走が始まった。

参道に上り返し、小田と別れを告げる。ジャングルパークを抜けたところで南伊豆石廊崎線に出会う。そこで一見マンホールの蓋かな？と思わせるような形の二等水準点を発見。初めて見る代物だ。其処から200m位西に向かい、切り通しを抜けたところから、道路右手の山の斜面に果敢に突入。少しの藪など目にもかけず立ち木に捕まりながら登ると直ぐに尾根どうしになった。205mにあるテレビアンテナの切り開きから、伊豆西南海岸の海の展望が素晴らしい。一旦下って最低コルに出ると石廊崎と中木を結ぶ峠道に出会う。古びた道祖神がポツンと一体あった。古(いにしえ)の道に郷愁を誘う。

ここから北に向かう。230mのちょっとしたピークに出るが以前の富士山と様子が違う。振り向くと何と南に富士山が見える。間違っただ。踵を返し尾根から東に向かい少しの藪を漕いで一気に富士山頂上着。瓦や石垣が散乱する中に素朴な祠があった。三等三角点を確認。展望は南に太平洋が広がる。

次は「恒々山」に向かう。下って上り返し、入間に通じるコンクリ舗装に出ると、お椀を伏せたような「恒々山」が顔を見せた。突っ切り竹やぶをかき分け約1時間半で頂上に着いた。太平洋の大海原が長閑な広がりを見せ、清々しい展望である。二等三角点を確認。先を急ぐので、ゆっくりする暇なく下山をする。

下りは150mで疎道になり、直ぐに二条に通じる林道となった。少し車道を歩き谷戸山に繋がる尾根の末端の畑からとりつく。それを見ていた飼い犬に、遠くから吼えまくられ、悪いことをしているわけでもないのに、後ろめたい気分になるのが不思議だ。あの犬は絶対番犬になる。鹿や猪対策の金網を乗り越え、尾根に上がりこみ、道がある？ない？という尾根筋を多少の藪を漕ぎながらいくと谷戸山。首のとれた道祖神が一体。谷戸山からルンルンと下りすぎ、下賀茂方面に下ってしまい、分岐まで引き返す。此处で地図読みの難しさを痛感。引き返す途中で行き会った町人に道を尋ね、はっきりとした峠道を下ることができた。

三角点には名前がある。大体其処の町名がついていて平凡な名前が多いけれど、下小野の四等三角点は、「小町」という粋な名前がつけられている。下小野の小野をとって小町をつけたと思うけど……。遊び心があっていいねえ……。という話を道々してきた。で、それは、又田んぼの中にあるという事で、集落にはいつてから地元の人に聞いて探してみた。「あった！」本当に田んぼの中にあった。マンホールの蓋に似た四等三角点だ。小野の小町碑もあるという事も聞いて、探してみる。道からちょっと上がったカヤトの中にそれはあった。

「浮草を かきわけ見れば 底の月  
ここに有とは 誰も知らなん」

天平十三年三月九日 東小町

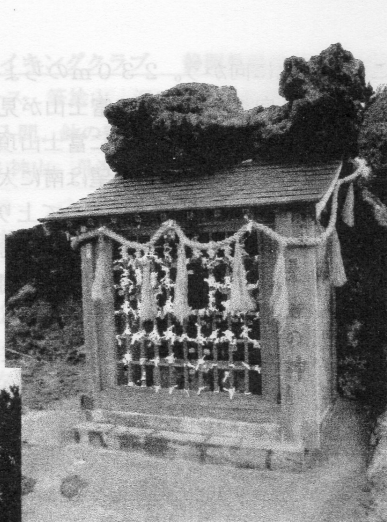
#### 【感想】

低い山だが地図読みが難しい・・・と感じた山行である。石廊崎から天城まで伊豆の約半分ほどの行程であるが4日間を要した。最南端よりの林相は、根元から枝分れし、ユラユラと上へ上へ伸びたような木が密集して一種独特の雰囲気漂う。天城山近くになると大木が多くなり、枝が天空に伸び伸びと張って、とてもきれいな林相だ。里山の良さをしみじみと味わって、更に伊豆の山が好きになった。しかし、中ほどになると、展望は山また山で迷子になったら抜けられないだろうと思う。一人では決して来られない山域を縦走出来た事に、サポートをしてくれた下田の小田氏とメンバーに心から感謝をしたい。

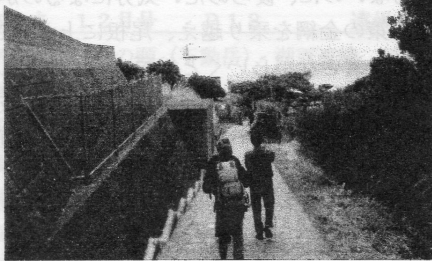




石廊崎港



石廊崎の社



石廊崎灯台



石廊崎灯台



富士山三角点

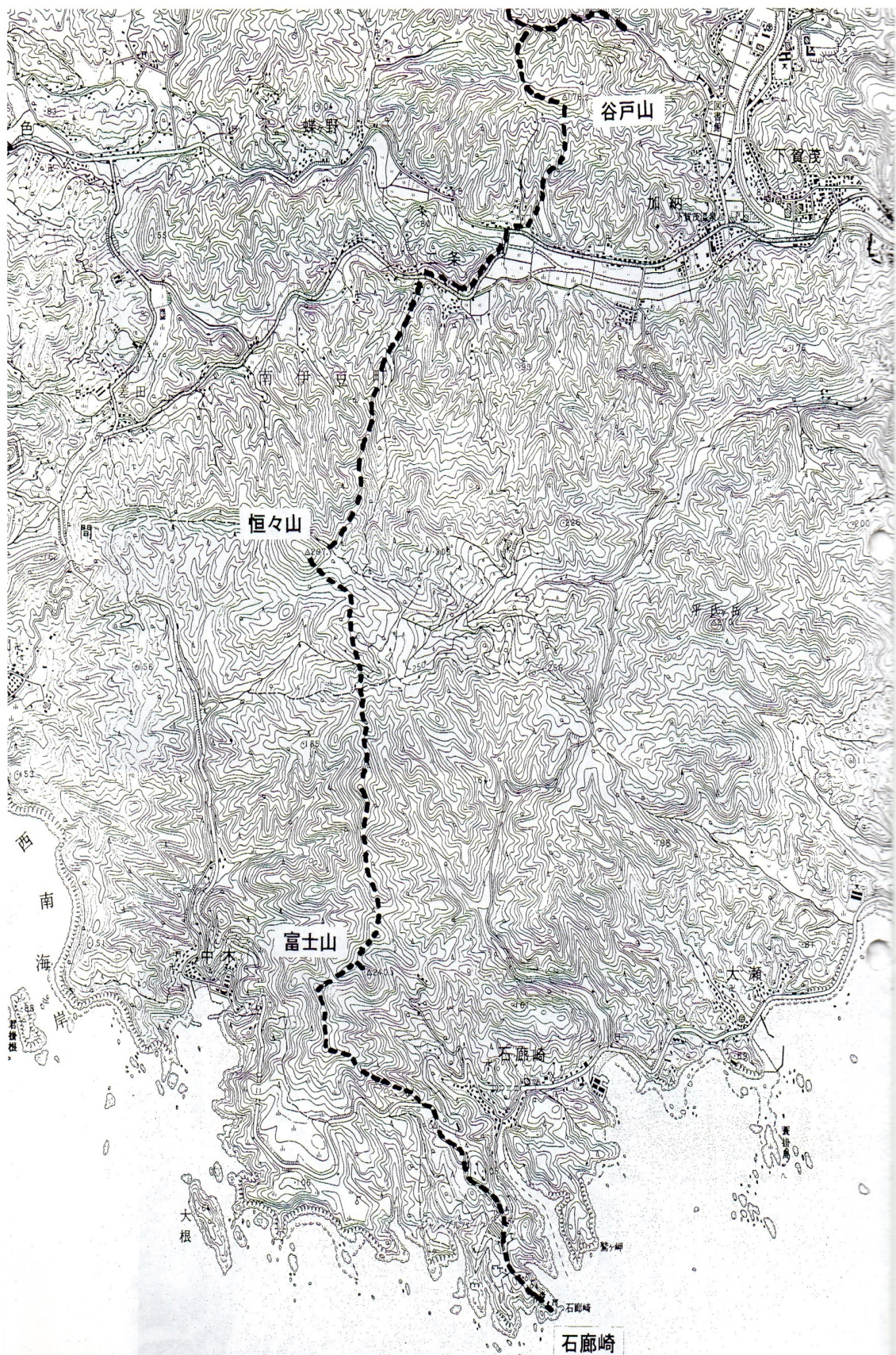


富士山に向かう

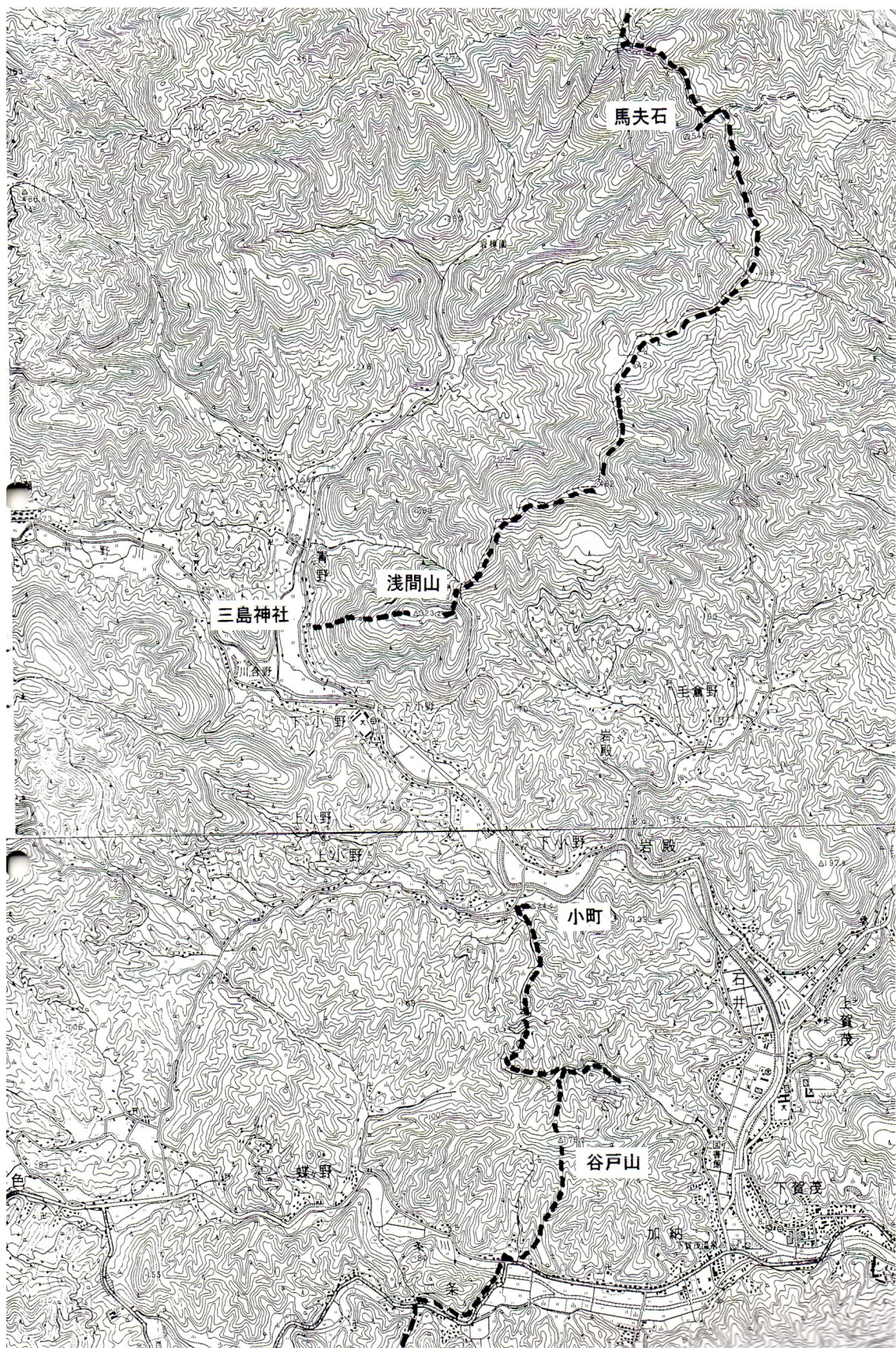


富士山三角点











静岡県連・40周年記念山行報告書

行 程	第2日目	報告者	齋藤富夫
年 月 日	2005年12月30日(金・晴)		
山 名	浅間山(せんげんやま・三角点名=浅間山・三等三角点、323.23m) 馬夫石(まぶいし・三角点名=青野村・二等三角点、544.97m) 517m峰(三角点名=加増野村・三等三角点、517.32m) 娑娑羅山(ばさらやま・三角点名=娑娑羅山・三等三角点、608.10m)		
コースタイム	下田・起床04:00—青野・三島神社発06:35 —浅間山07:15—馬夫石09:50—加増野村11:20—娑娑羅峠12:40—娑娑羅山13:40—435mのコル15:00—志保口バス停15:30—下田(泊)		
地 図	伊豆松崎・下田		
体力度=4・やや大変    技術度=3・普通    読図=難しい    藪漕=少しある    道標=全くない 展望度=娑娑羅山少し    トイレ=ない    三角点=多数    携帯=部分的			
娑娑羅山の厳しい上りをこなす			
標 高 差	上り=合計約1020m 下り=合計約890m		
参 加 者	CL 後藤隆徳(58)・加藤秀子(55)・齋藤富夫(55)		

昨山下山した下小野より直ぐ上手の青野の集落まで小田氏に送って貰う。今日の出発点は、昨山下見をしておいた三島神社。立派な鳥居と社の前に大きな舞台が据えられていて小さな集落には不自然なほどだ。

普段、信仰心などないのだが神社の前に立つと手を合わせて願する癖はついている。いろいろ願い事はあるのだが、神様も年末の30日とあつては忙しいだろうから山行の安全祈願だけにした。

浅間山の登りはキツイ藪漕ぎ。寒気が入って寒い朝だがしっかり汗をかいた。40分程で山頂に着く。山頂には三角点と石の祠があり、先に着いた後藤さんが周辺を掃除し満足そうな笑みを浮かべていた。

相変わらず地図とにらめっこの山行だがこのあたりは比較的分かりよい。462m峰にでると展望が開け東伊豆の海が見えた。この山頂には、不動明王と読める高さ1mはある石柱が立っていた。こんな重い物を誰が運んだのかと話題になる。

幾つかの小ピークを超えると地図に記載されている送電線があり、間違いのない事を確認する。馬夫石(まぶいし)は、登山道らしきものから西に入り込んだ所が山頂で樹木が生い茂り展望は無い。三等三角点はしっかり確認できた。ここには何故か三角点の石柱が三角点とは別に一本転がっている。

送電線を左に見ながら進むとNo45の番号のある鉄塔に出た。ちょっと分かりづら



い所で戻りかげんに送電線の点検のために付けられたと思われる道を進む。No48 鉄塔で送電線と別れ、北に進路をとって 517.6m 峰に向かう。ここも三等三角点を確認できた。ここから婆娑羅隧道にむかうのだがルートが難しい。下りで尾根がハッキリしている場合は問題ないが、壁状の部分はかなり難しい。400m の小ピークから隧道の真上に出なければならないのだが右に寄りすぎに気づき登り返した。

古の婆娑羅峠は幾体もの道祖神があり、すでに苔生していたが頻繁に往来したであろう往時を偲ばせるものがあつた。「宝暦六丙子」と読める地藏尊もあつたが、歴史に不明な私には、いつの頃のものかさっぱり分からなかった。

峠からさらに痩せ尾根を下りきり、婆娑羅山への登りにかかる。標高差 300m をほとんど直登に 1 時間喘いだ。婆娑羅山は秀麗な形をしたいい山だ。

それにしても、伊豆の山は馬夫石や婆娑羅山（ばさらやま）などとあまり馴染みのない名前の山が多い。それぞれ謂れはあると聞いたが、正確なところはわからないので此处には記さない方が賢明のようだ。

山頂で三角点を確認し志保口への分岐目指して下りにかかるがまたしてもルートに迷う。支尾根が何本もあり其々にみな踏み跡がある。何度か登り返し軌道修正してようやく分岐にたどり着いたが、180m ほど下るのに 1 時間以上も費やしてしまった。地図にも載ってないような小さな尾根が同じ方向に走っており踏み跡がある。里山の難しさを改めて思い知った。

今日は、後藤さんの経験と嗅覚の鋭さに助けられた一日だった。分岐から志保口までは簡単な下り、30 分ほどで志保口のバス停に着いた。加藤さんが「得意」のヒッチで何処かのオバさんの車を止め、斉藤が車を回収に行った。



昨日歩いた伊豆半島南端の山々は、生活の匂いがした。幾つかの峠道に出会い荷物を背負って西海岸と東海岸との行き来に急いだ人々の様が容易に創造できたし果樹が山深くまで植えられ、それに沿って林道が延び、まさに人々の生活と共にある里山の風景だった。

しかし、今日歩いた山は幾重にも山波が連なり、入り込む人もまったく無い山やの世界だった。後藤さんが「伊豆アルプス」と呼んでいたが違和感のない相応しい呼称の様に感じる。

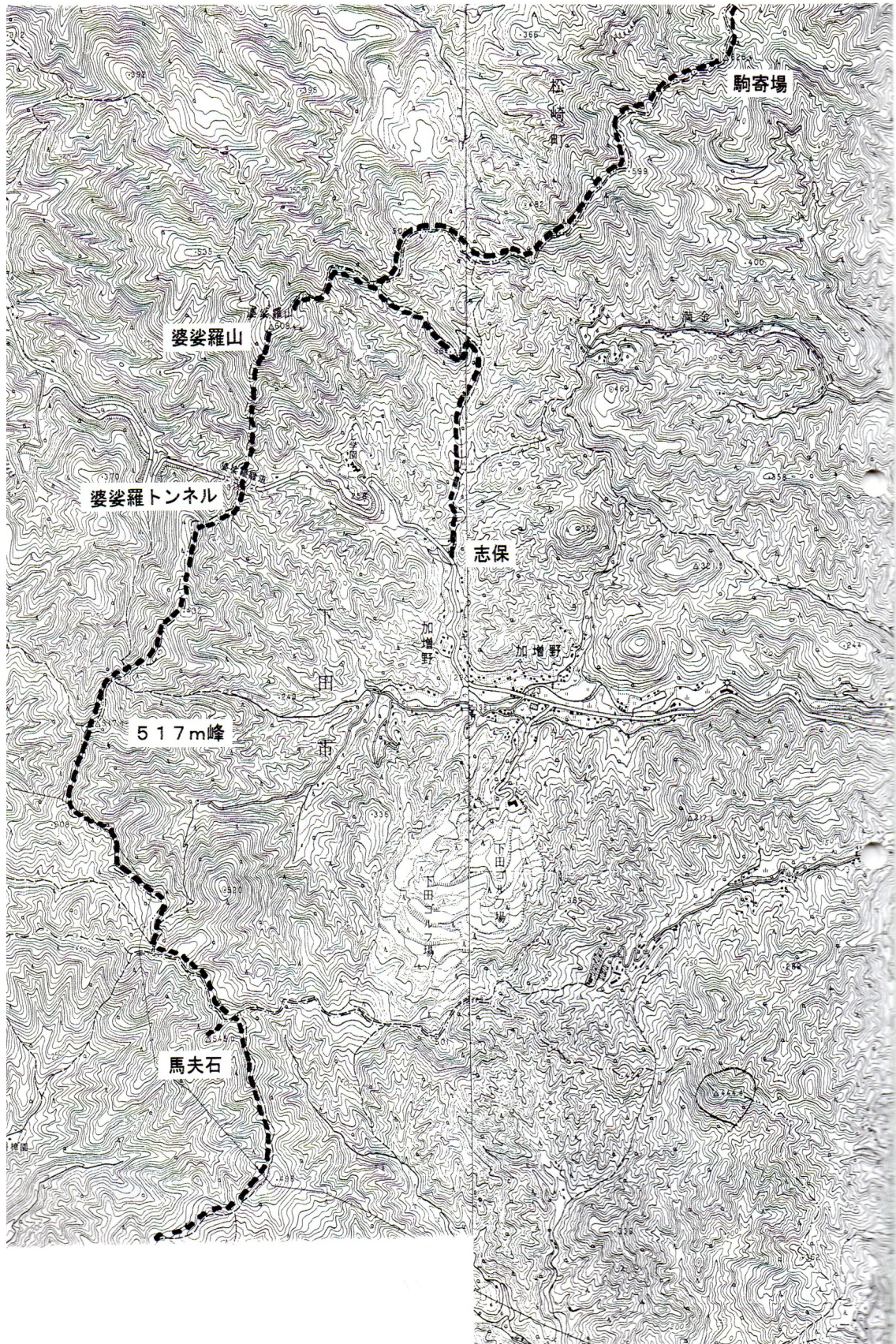
あちこちに湧き出る豊富な温泉、海・山の幸に恵まれ、人に出会う事もまれな静かな山々。伊豆の山の魅力は未だあまり知られていない。今回、旬な山行を同行させて貰ったが、やがて知れ渡り此处も中高年登山者で賑わう事になるのか。

## 今山行の感想

「石廊崎から旧天城峠まで」このフレーズがいい。

2 万 5 千の地図 3 枚線が繋がり、文字通りの縦走となった。後々まで記憶に残る山行です。







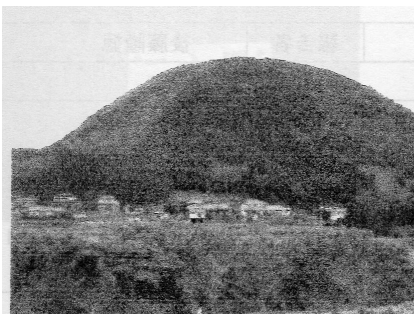
朝口を治ひし



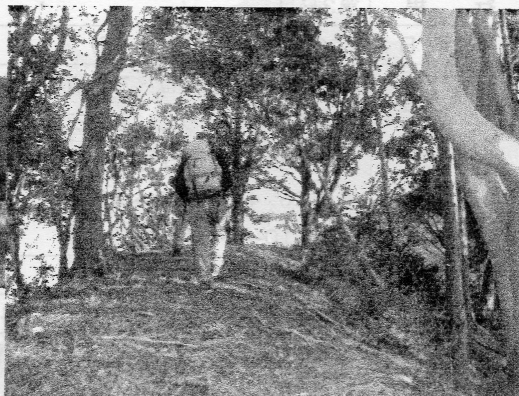
山の中の1m石柱



馬夫石の余り三角点柱



浅間山



静岡県連・40周年記念山行報告書

行 程	第3日目	報告者	後藤隆徳
年 月 日	2005年12月31日(土・晴)		
山 名	駒寄場 (こまよせば・三角点名＝駒寄場、三等三角点、626.47m) 三方平 (さんぼうだいら・三角点はない 992m)		
コースタイム	起床4:00—志保口・林道終点発6:50—435mの峠7:20—599m峰—駒寄場(626.4m)9:15—大鍋峠10:30—三方平12:25(992m)—長久郎登山口13:10—下田(泊)		
2万5千図	伊豆松崎・下田・湯ガ野		
温 泉	大沢温泉・大沢荘「山の家」0558—43—0031(500円・無休)		
体力度＝やや大変 技術度＝普通・地図読みは難しい 藪漕＝少しある 道標＝全くない 展望度＝まあまあ トイレ＝ない 三角点＝ある 携帯＝部分的にOK			
伊豆ALPSハイウエーを飛ばす			
標 高 差	上り・435mコル～駒寄場＝約191m、大鍋峠～三方平＝約365m 下り＝		
参 加 者	齋藤富夫(55)・加藤秀子(55)・後藤隆徳(58)		

今日で3日目。まずは小田さん、齋藤さんの車で婆娑羅峠を越え、大沢から大鍋峠に向かう。齋藤さんの車を大鍋峠にデポし、小田さん車で昨日下った志保口上の林道途中まで送って貰う。昨日下った道を再び辿り婆娑羅山北東435mのコルまで上る。ここからまず500m峰に向かう。500m峰は自然林が多い感じのいい山だった。後ろに婆娑羅山が大きい。何故か頂上に「キジ」跡があった。

頂上から東に向かうがルートが分からない。上りは良いが下りは難しい。北の尾根に入ってしまった。急激に下降しコルからの上り返しがキツイ。一昨日、昨日の疲れがギシギシと襲う。この辺りには切ったばかりの鉋跡が数箇所あった。599m峰辺りからルートは綺麗な「ハイウエー」になる。昔の山仕事の道だろう。途中、登山道にワイヤーロープが埋まっていた。それにしてもこの道は信じられない道だ。快適に歩くと三角点名「駒寄場(626.4m)」に着く。遥か彼方に長久郎が見える。ガンガン飛ばし大鍋峠に着いた。

まだ時間は早いので、明日の長丁場を考え長久郎まで行く事にする。しかし、その場合、帰りが困るので齋藤さんには悪いが、長久郎林道に車を回送して貰う。ここから加藤と二人で行く。大鍋峠から850m付近まで切り払いが続きルートはいい。この道は長久郎林道途中から上って来ている様だ。雪が出てきた。ここから992mの三方平まで藪っばい。ただ、950m付近からブナ・シャクナゲが沢山出て来て嬉しくなる。三方平周辺の自然は素晴らしい。

三方平を下って行くと車を回してくれた齋藤さんがやって来た。長久郎を上って来た。明日のルートの下見をし、雪を蹴散らし長久郎登山口に向かい、ここから再び下田に下山する。途中寄った大沢温泉「大沢荘」の露天風呂「山の家」は毎分ドラム缶1本自噴する素晴らしい温泉だった。





三方平



三方平北面からの十郎左工門



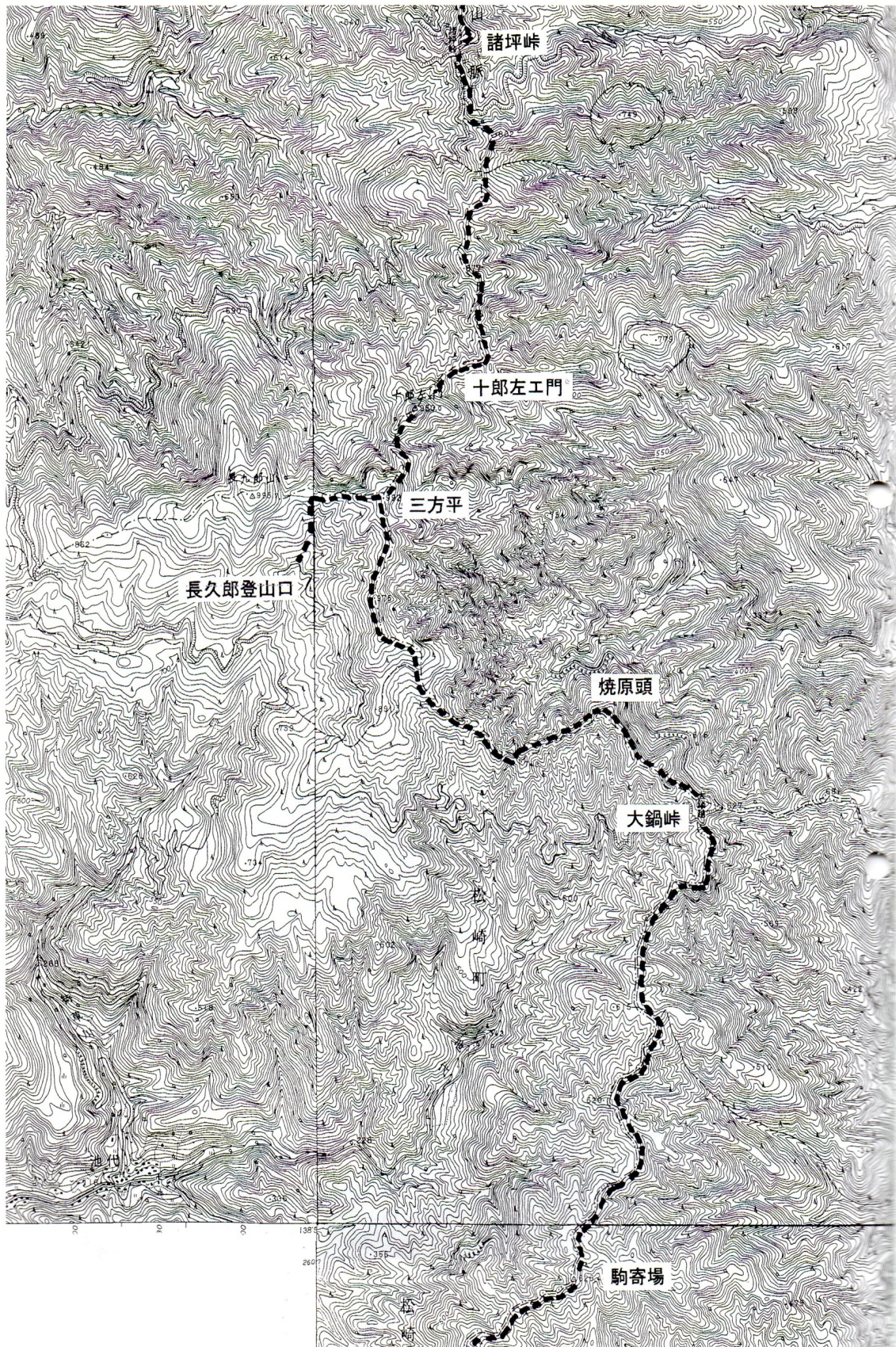
十郎左工門の山名表示板

今の白川峠の表示板



昔の表示板  
昭和46年(1971年)  
と読める







静岡県連・40周年記念山行報告書

会 名	第4日目	報告者	後藤隆徳
年 月 日	2006年01月01日(日・曇小雪後晴)		
山 名	十郎左エ門(じゅうろうざえもん・三角点名=十郎左エ門、三等三角点、953.65m) 猿山(さるやま・三角点名=猿山、三等三角点、1000.01m) 小僧山(こぞうやま・三角点はない・970m)		
コースタイム	下田・起床04:00—車発5:00—長久郎登山口発6:30—三方平7:15—十郎左エ門7:45—北ノコル8:40(迷う)—白川峠9:40—諸坪峠10:00—猿山10:50—小僧山12:00—伊豆山稜線12:20—旧天城峠(二本杉峠)12:40—大川端13:20—車回収—長泉町		
地 図	仁科・湯ガ野・湯ヶ島		
体力度=4・やや大変    技術度=3・普通    読図=難しい    藪漕=少しある    道標=全くない    展望度=娑婆羅山少し    トイレ=ない    三角点=多数    携帯=部分的			
二本杉峠で感動・感激の握手			
標 高 差	上り=合計約200m+70m+300m=約600m 下り=合計約		
参 加 者	CL 後藤隆徳(58)・加藤秀子(55)・齋藤富夫(55)		

第4日目で最終日。何とか今日中に抜きたいものだ。天気は午前中、ハッキリしない。3名で長久郎登山口を出発。雪がチラホラある。。

まずは922mの三方平を目指す。この辺りの自然は素晴らしい。昔はさぞかし豊かな森であったろう。三方平から十郎左エ門に向かう。北に急下降が続く。北面で地面が凍り歩き難い。これからの時期はアイゼンが必要になる。

前方に十郎左エ門が大きく押し掛かる。大きく立派な山だ。南から上るのは初めて。過去2回上っているが、いずれも北面からだった。キツイ急な上りをこなすと頂上にパッと飛び出る。懐かしい頂だった。しばし休憩し下り始めるとパラパラ雪が舞ってきた。少しだけ冬山を味わう。余りに酷いのでカップを着る。ここの北面頂上直下の下降は泥壁で難しい。今回、一応ザイルを用意した。一箇所安全を期し使用。何と言っても静岡県連の理事長、遭難対策部長、事務局長のパーティーだ。事故など絶対起こせない。(笑い)

この下もルートがハッキリせず右往左往したが東を強引に下る。そこから途中、白川峠を経由して諸坪峠まではマアマア快適なルートだった。白川峠には随分古い道標があった。昭和46年(1971年)と書いてあった。苔むしやと文字が確認出来た。この辺から眺める猿山は立派で大きい。諸坪峠から長いトラバース後、急な上りを猿山へ上る。上部はいい自然林が続く。大きなブナが目を引く。振り返れば「石廊崎」はもう遥か彼方になった。まあ、人間の足は偉大である。

頂上付近は笹もなく快適そのもの。3年前のあの笹は何処へ行った。辺り一面覆っ



ていた笹は枯れてしまったのだ。確かに歩き易くはなったが、他の植物への影響も心配である。やっぱり地球の何処かがおかしいか。

ところで猿山の三角点の標高は999.8m。しかし、よく観察すると三角点の南が少し高い。恐らく猿山そのものの標高は1000mあるだろう。その後、国土地理院のインターネットを検索したら、三角点そのものの標高が改定され「1000.01m」になっていた。三角点がこの標高だから南は実際もう少し高いかも。

ここから小僧山まで上ったり下ったりが続く。でも笹がないから歩き易い。小僧山を下ればフィナーレは近い。ドドドと降りて遂に伊豆山稜線歩道に出た。事実上、今縦走はここで終わりである。最後の締めで旧天城峠に向かう。

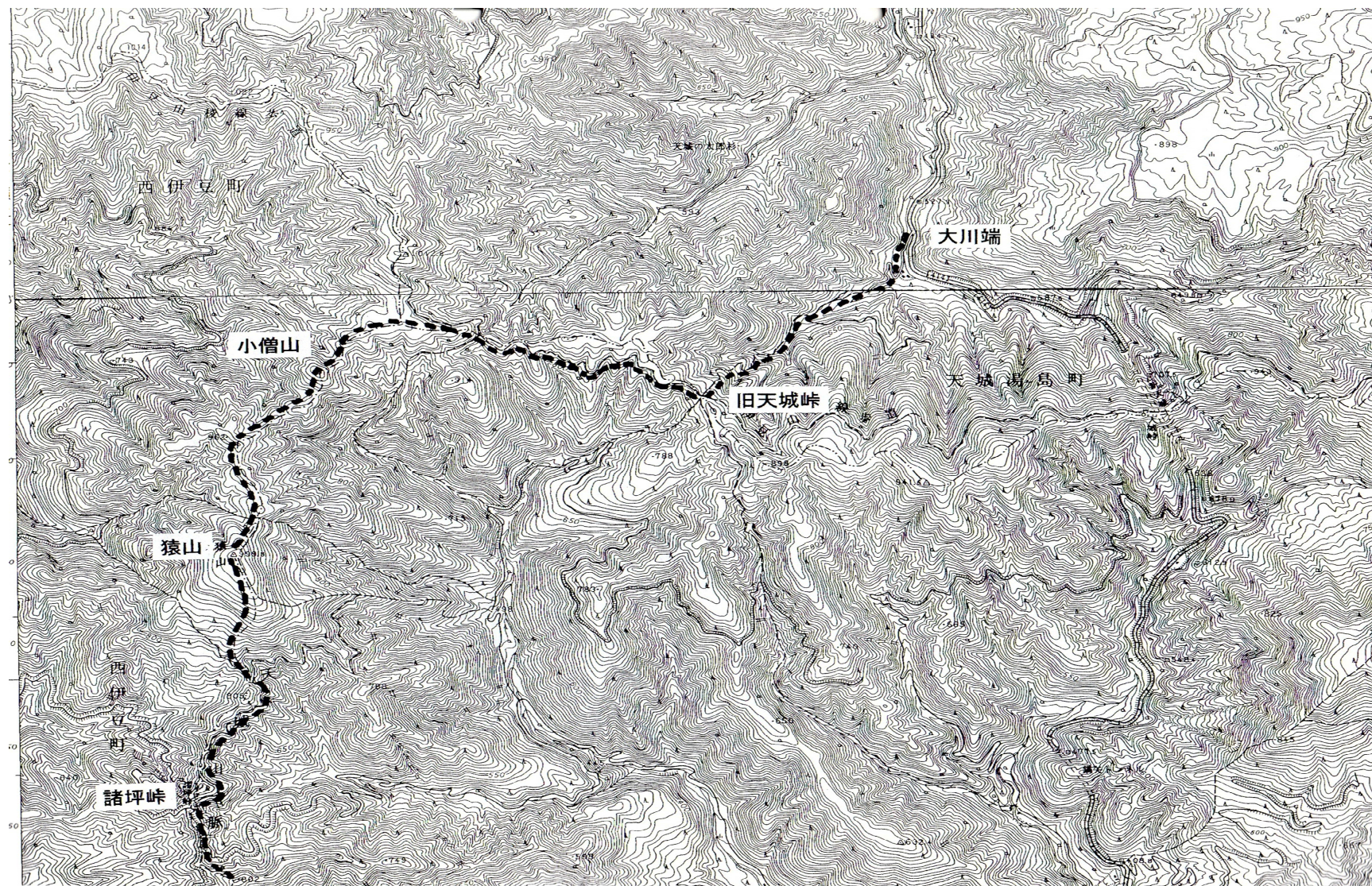
峠で今山行初めて登山者に会う。「天城山ひとり一石運動」を展開している伊東の山口康裕さんだった。昨夜は友人二人と山で泊まったそう。残りワインを頂き名刺交換をして別れた。

大川端に下る。遂に終わったのだ。皆よく4日間、頑張った。そして下田の小田会員には感謝・感謝・多謝・多謝である。小田ちゃんなくして今回の成功はなかっただろう。ありがとう小田ちゃん。



婆娑羅山









猿山南面のブナ林



猿山頂上  
三角点は向こうに見  
手前が幾分高い  
1000mはありそう

2006年1月1日撮



猿山

諸坪峠

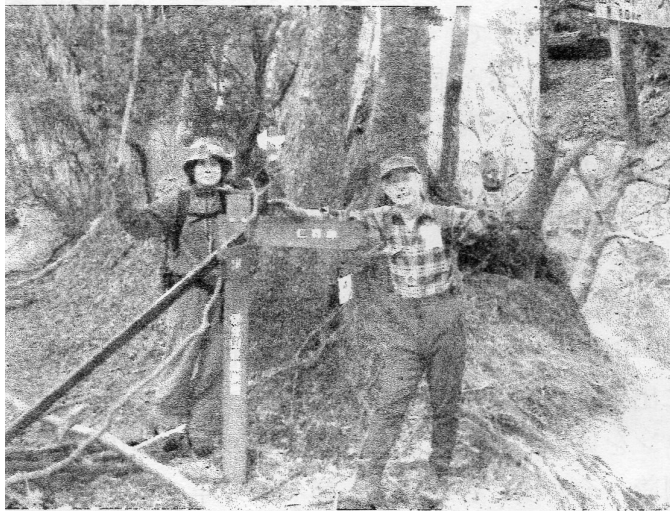




裾野麗峰山の会、伊豆里山クラブ  
後藤隆徳(58)



伊豆山稜線で完走、パンザ〜イ



4日間、がんばりました



旧天城峠



石廊崎の水を狩野川源流に流す

2006年1月1日撮影



今山行の仲間の皆さん

あさぎり山の会 齋藤富夫さん(56)



皆さん充実したいいお顔です

裾野麗峰山の会、伊豆里山クラブ  
加藤秀子さん(56)